

vol. **13**

新しい附属学校の教育のかたちを求めて
～教師教育の推進に向けて～



ポローニア
paulownia



筑波大学附属学校教育局
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

巻頭言



附属学校教育局長
谷川 彰英

AKIHIDE
TANIKAWA

附属学校と6年間

私が筑波大学学校教育部長に赴任したのは平成15年（2003）年の4月だった。あたかも国立大学の法人化を目前にして、その準備に追われている時期であった。その年はまだ学類・大学院の授業等も掛け持ちで、滅茶苦茶なスケジュールをこなしていた。まだエクスプレスは開通していず、高速バスをうまく使いこなすしかなかったが、今考えれば想像を絶する仕事ぶりだった。

平成16年（2004）年4月、法人化とともに附属学校教育局が設置され、筑波大学理事として教育長を拝命し、学校教育部長時代を含めるとやがて6年が経過しようとしている。この間、やれたこととやれなかったことがあるが、とにかく11校の附属学校がかなり歩み寄ってきたことは成果といえるだろう。この「ポローニア」の創刊もそうだが、附属の全校をあけて執筆した『日本の教育を拓く』（晶文社）を出せたことは大きかった。

そんな作業を通じて、附属学校の将来構想として「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3つの拠点構想をまとめられたことは嬉しい。特別支援学校の統合キャンパス構想は大学の執行部の交代等も控えていますぐの具体化は難しいが、路線だけは明確に敷けている。

6年間を通じて学んだのは、11校のそれぞれがかけがいのない教育実践・研究を積み上げてきていることであった。それは私に教育の大切さを改めて確認させてくれた。そのことが私にとっていちばんの収穫だった。

筑波大学の附属学校のためにできることをさらに追求しよう。

目次

■巻頭言

■夏期研修会

■第3回「科学の芽」賞
応募結果

■免許更新講習

■附属の今

■研究紹介

■新任教員奮闘中

■温故知新

■新任教員交流会

附属学校と6年間 ●谷川彰英

平成20年度附属学校教育局夏期研修会 ●熊谷恵子……………1

第3回「科学の芽」賞 応募状況 ●篠原吉徳……………1

免許更新制

～附属の知を伝える免許状更新講習の取り組み～ ●小林 汎……………2／3

実施校の担当者からの感想 ……原田早苗／宮崎章／佐藤孝二／長谷川康男

附属の今(附属中学校) ●角田陸男……………4

「Research question」 ●石川満佐育……………4

短距離走のような日々 ●安宅由佳……………5

受け継がれる高木博士の理想と理念 ●吉沢祥子……………5

平成20年度 附属学校新任教員交流会 ●篠原吉徳……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.13
CONTENTS

平成20年度 附属学校教育局夏期研修会

附属学校教育局 熊谷恵子

今回は、日本におけるLD（学習障害）教育の牽引者である上野一彦先生（附属駒場中等学校10期生、東京学芸大学教授）とソウルオリンピック女子柔道で銅メダルをとった山口香先生（本学大学院修士課程体育研究科修了、本学准教授）からご講演をいただいた。

上野一彦先生は、「特別支援教育の展望と課題ー附属学校の役割ー」というご講演題目であった。今は、約1%を対象とした特殊教育から約1割に対応する特別支援教育への転換期である。特別支援教育体制を整備するためには、学校の校長や校内で具体的に何を行わなければならないか。知的遅れのない発達障害であるLD、ADHD、自閉症スペクトラムの子ども達をどうやって理解するか。附属学校においても現在文科省の指定をうけてモデル事業に参加している学校があること。区市町村で行っている特別支援教育の先進的な取り組みを紹介し、教師、学校が子どもを抱え込まずに継続的な支援を行うためにどのようにしたらよいか等のお話をいただいた。附属学校でも特別支援教育に関するさらなる取り組みが必要であることを学ばせていただいた。

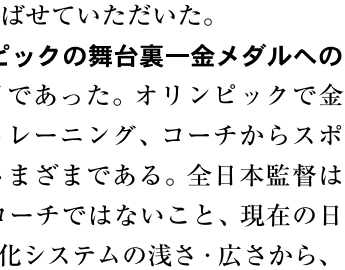
山口香先生は、「オリンピックの舞台裏ー金メダルへの戦いー」というご講演題目であった。オリンピックで金メダルを取るためには、トレーニング、コーチからスポンサー、お金の問題までさまざまである。全日本監督はその人が普段ついているコーチではないこと、現在の日本のオリンピック選手の強化システムの浅さ・広さから、

小さい頃からのタレント発掘や一貫指導が必要であること、中国や韓国など他国のオリンピック強化トレーニングにかかるお金や方法が異なることから、ナショナルトレーニングセンターを設置し、中学生から競技人として育成を図っていく試みがなされるようになったが、果たして日本に合うかどうかはわからないこと、日本男子柔道の惨敗の要因から、ベテランの生かし方、ジュニアの育て方など考え直さなければならないことが多くあること、オリンピックの応援一つで国の態度がわかるので、オリンピックという機会を利用して日本を見せるということも必要であること、いろいろな国を見て学んでほしいこと等のお話をいただいた。子どもをどのように育てていくかという教育の本質にも迫る話で迫力があり、山口先生からもオリンピックはもちろん、一般的な教育に関しても新しい見方を教えていただいた。

講演を挟んだ時間には、附属坂戸高等学校演劇部による「コントとパフォーマンス」を行ってもらった。マイク無しでもちゃんと通る発声や元気のある動きに圧倒された今の若者文化を我々ももっと知るべきではないかという教訓を得たような気がした。



山口香先生



上野一彦先生



谷川教育長

第3回 「科学の芽」賞 応募状況

「科学の芽」賞実行委員会
附属学校教育局
篠原吉徳

9月30日（火）[消印有効]に締め切られた、2008年度の「科学の芽」賞には、1,000件を遥かに上回る1,248件（〔個人1,177件〕〔団体71件〕）の応募がありました。因みに、昨年度は、846件でしたので、1,248という数字は、昨年度比で、ほぼ5割増しであることを表します。とりわけ、小学生部門の応募件数の伸び率が著しかったです。1,248件の内訳は、小学生部門が682件（〔個人661件〕〔団体21件〕）、中学生部門が519件（〔個人501件〕〔団体18件〕）、高校生部門が47件（〔個人15件〕〔団体32件〕）です。全国的な規模での応募があり、さらには、海外の日本人学校からの応募もあり、第3回を迎えた「科学の芽」賞は、広く知られる存在になってきたようです。11月下旬の「受賞作品」の報道発表に向け、現在、厳正なる審査が行われています。なお、12月20日（土）には、筑波大学大学会館（特別会議室）において、表彰式並びに発表会が举行されます。以上、10月30日現在の「科学の芽」賞応募状況の概略の報告でした。

免許更新制

附属学校教育局 小林 汎

～附属の知を伝える免許状更新講習の取り組み～

今年度、全国101大学法人で、来年度からの本格実施に向けて、「教員免許状更新講習（試行）」が行われました。今回は無料で講習が受けられることもあり、どこかの大学の講習もすぐに定員オーバーしたようです。

筑波大学の場合には、6月の「土日コース」と8月上旬の「夏季休業中コース」の2回、各回150名程を対象に30時間（5日間）ワンセットの講習を行いました。8月開催分については、募集締切りの1カ月以上前、5月中旬に満員となってしまいました。

筑波大学では、「選択」の18時間を3つの講座—「現代教育の課題と展望」（6時間）、「教養の新たな世界を体験する」（6時間）と「附属学校実践演習」（6時間）に分けて構成しました。この中で、最大の特徴であり、かつ全国唯一だったものは「附属学校実践演習」を構想し、附属の教育現場を見てもらうプログラムを取り入れたことです。

6月28日（土）は附属小学校、中学校+高等学校、駒場中・高等学校、大塚特別支援学校、桐が丘特別支援学校、久里浜特別支援学校の6会場で、8月6日（水）には小学校、坂戸高等学校、視覚特別支援学校、聴覚特別支援学校、桐が丘特別支援学校の5会場で開催しました。

更新講習は通常授業が行われていない「土・日」に実施し、「長期休業期間中」等の縛りがある関係で、児童・生徒の授業風景を見学してもらい研究協議を行う企画は大変でしたが、各校が工夫をして、それぞれの持ち味を発揮した講習が実現したと思います。今回は受講者の多くが茨城県の先生方だったために、遠距離の負担を感じた方もいるようですが、講習全体の中では、非常に高い評価を受けました。教員は現場を見たいし、現場から学びたいとの気持ちの強さを痛感した次第です。（紙面の関係で、実施したうちの4校の担当者からの感想を掲載します）

来年度は、8月下旬に「東京地区」での開催も予定されています。「教育の筑波」として全国に教員を送り出してきた歴史と伝統に、新たな1ページを加えるためにも、附属学校を含めた「東京キャンパス」の役割は重要性を増してくるでしょう。附属学校では、「附属学校実践演習」を各校年2回開催するだけでなく、大学と連携して豊かな更新講習実現のために検討を進めています。

今回の講習は、受講する側の現職教員にとっては、突然降ってわいたものであり、何で今さらとの思いは強いでしょう。しかも、土日や長期休業中に30時間の講習を受講して試験を受けなければいけない、3万円程度の講習の費用は自己負担しなければならない等々に対する抵抗感は強いでしょう。実施する側としては、受講者が「講習は有意義だった」「3万円は安かった」「筑波で受講して良かった」と思えるような講習を準備する必要があります。大変な仕事ですが、附属学校の新たな使命として前向きに取り組んでいきたいものです。



附属聴覚特別支援学校での研究協議風景



附属中学校での理科の授業風景

実施校の担当者からの感想



校種をこえて、 共通する視点を学ぶ

附属視覚特別支援学校 原田早苗

本校では、8月6日（水）に、様々な校種・教科の受講者25名に、国語、数学、社会、理科の各教科担当者が、「教育の本質について考える『知る』から『わかる』へ——イメージ・言語・理解」をテーマに、講習を実施しました。特に、本実践演習においては、参加者の方々のニーズは多岐に渡るであろうと予測できたため、その方々に対して、本校の日頃の実践をどのような展開によって伝えるかについて多くの検討が必要でした。その結果、体験型ワークショップを軸に据えて、そのまとめと考察を通して日頃の指導の際の工夫や方法についての講義という形式で行いましたが、受講者の方々の非常に熱心な取り組みを確認することができました。

感想には、「基本を同じにしつつ、様々な方向からの取り組みを知ることができ面白かった」「異なる校種であっても、指導の際共通する視点が多く含まれており参考になった」などがありました。また、最後の試験の解答にも、担当者が求めていた内容が記述されていたことから、午

前8時半から午後7時近くまで掛けた今回の取り組みを、満足して終えることができました。



負担と展望と

附属駒場中・高等学校 宮崎 章

附属駒場中・高の「附属学校実践演習」は、6月28日（土）に「総合的な学習の時間を使った『高2ゼミナール』授業の実際」と題して行いました。

まず午前中は、15人の教員が高2ゼミナール授業を11講座公開し、午後は全員が参加しての研究協議で、ゼミナールの位置づけや内容に関する質疑応答を行いました。最後に「筑駒の教育がめざすもの」と題して学校紹介を行って、受講者との交流も図りました。

学期中の忙しい時期に土日が連続して講習日なので、「休みがないと書きましたが、自分のためになりました。進学校の授業をみてもしょうがないかなと最初は思いましたが、とても勉強になりました」とか、学力重視のプログラムと勝手に思い込んでいましたが、「その正反対で、コミュニケーション能力の重視だったり、学校行事に重きを置いたり、とても魅力的なカリキュラム」でしたとも書いていただきました。附属学校実践演習は、たぶん大学での講義以上に、現場の教員である受講者にとっては有意義だったと考えられます。負担増ではあるものの、展望も見えてきたと言えきかもしれません。



2回の附属学校実践演習を試みて

附属桐が丘特別支援学校 佐藤孝二

本校では、6月28日（土）「肢体不自由児の学習指導」をテーマとして、肢体不自由児の障害特性に応じた学習指導のあり方と指導方法及び通級支援教育について、授業参観（小学部第4学年の国語・算数・書写）、児童との交流、講義及び演習等の体験的な講習を行いました。また、8月



中学部の授業風景～生徒の体づくり運動

実施校の担当者からの感想

6日（水）には「自立活動の指導における個別の指導計画のあり方」をテーマとして、自立活動の捉え方、「個別の指導計画」の意義と作成及び評価プロセスについて、授業参観（中学部第3学年の体育「単元：体づくり運動」）、「個別の指導計画」の作成過程である「問題状況の整理」、「課題設定」について実際の作業を想定した演習、実践研究の成果の講義等により、明日の指導に役立つ実践的な講習を行いました。受講生の多くが通常学校の教諭の方々でしたが、特別支援教育をより理解し、この講習で研修した内容を通常学校でも日頃の実践に活かして頂けると幸いと思っています。



公開研究会とは一味違う熱心さ

附属小学校 長谷川康男

附属小学校は、6月と8月に2回、免許状更新講習の講座を、授業展開を中心に受け持ちました。受講者の人数は、附属11校全体の40パーセントを占めました。

それを副校長以下4人で2回行ったため、周りからは、「大変だったでしょう」「運が悪いね」等々、いたく同情されました。確かに、講習では副校長が全体説明と社会科の授業と講義とテスト・評価を行い、算数科の細水教諭が授業と講義、テスト・評価を、同じように音楽科では中島教諭が、国語科では青木教諭が、それぞれ粉骨砕身して実践したのは事実です。

しかし、4人の感想は、公開研究会とはちょっと違った受講生の熱心さと、初めての免許更新講座の授業と講義への意気込みが相伴って、新鮮な気持ちで自分の授業と理論を見つめ直すことができたという充実感あふれるものでした。

受講者も授業を展開しての講義だったため、「分かりやすく勉強になった」「理論と実践が一致していて感心した」という感想が最も多かったのが印象的でした。



長谷川副校長の社会科の授業風景

附属中学校

附属中学校副校長 角田睦男

厳しかった暑さもようやくおさまり、空も高く気持ちの良い風が吹く頃となりました。生徒諸君は秋の2大行事である秋季大運動会が9月21日（日）に無事終わり、11月1日（土）に迫った学芸発表会（本校ではいわゆる文化祭ではなく、学問と芸術の発表会という質の高さを求

めて、このように呼んでいます）に向けての準備に忙殺されています。

本校の始まりは実に明治5年に湯島の昌平覺後に師範学校を創設した時にまでさかのぼることができます。そして、明治21年

（1888年）には師範学校に尋常中学科が作られ、本年で創立120周年を迎えることになります。

これを記念しまして、本年（2008年）10月10日（金）には、文京シビックホールにて、岩崎洋一学長先生、谷川彰英附属学校教育局教育長をはじめとする多くの来賓の方にお出で頂き、盛大な記念式典を挙行いたしました。ご来席賜った皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

何分歴史と伝統のある学校ですからクラブ活動でも日本の古い呼称がたくさん残っており、例えば、女子バス

ケットボール部は女子籠球部（略して女籠一じょううー）、サッカー部は蹴球部、ハンドボール部は送球部といった具合です。

さて、本校の教育目標は「調和的な心身の発達と確かな知性の育成、ならびに豊かな個性の伸張を図るとともに、民主的社会の一員として人生を主体的に開拓し、進んでは、人類社会の進展に寄与する事ができる人間を育成する」となっており、誤解を恐れずに申し上げれば「日本をはじめとする世界的な視野をもった真の社会のリーダー（エリート）を育成する」ということになります。この意味は、鼻持ちならない学歴をひけらかすようなさもないエリートではなく、自らの世界観をきちっと確立した後に、社会的な弱者にも暖かい目と手をさしのべることができる心豊かな人間になってほしい、と願っているわけです。本校の校訓は「強く、正しく、朗らかに」ですが、この校訓を本校の元校長であった故鎌田正先生に平成20年度の卒業記念として石碑に揮毫して頂きました。奇しくもこの揮毫が鎌田先生の最後のお仕事だったと聞いております。



「Research question」

附属学校教育局 準研究員 石川満佐育

私は現在、附属学校教育局に所属し、専門の発達臨床心理学の観点から、児童期から青年期までの様々な問題行動についての研究、ならびに相談活動を行なっております。

私の大きな「research question」は、どうしたら児童生徒が適応的に生活できるようになるかということです。

大学院生時から、児童生徒の攻撃行動、暴力の低減に寄与する研究がしたいと思い、欧米を中心に実証的な研究が進められている「ゆるし（Forgiveness）」という概念に興味を持ち、現在も継続して研究を行っております。私たちが生活している上で、自分の思い通りにならないことはたくさんあります。それは、自分の失敗体験であったり、他者に嫌なことをされる事であるかもしれません。このようなネガティブな出来事が起こったときに、その対象を「ゆるそう」とすることは、生徒の心理面、社会面への適応にどのような影響を与えているのかを検討しています。

また、附属学校教育局に所属してからは、児童生徒が社会の中で自らの生き方を考えてゆくために必要とされるライフ・スキルの獲得を目標とした「ライフ・スキルを高める心理学の授業」（附属学校教育局プロジェクト研究）にも携わっています。各学校の生徒さんのニーズに合わせて授業をするのは困難な事も多々ありますが、こうしたスキルを学習し獲得することは予防的な観点も重要であり、私のresearch questionに刺激を与える活動となっています。

臨床・相談活動では、児童生徒・保護者の方・先生方のいろいろな悩み、相談のニーズに対して、大学院時代に学んだ行動療法・認知行動療法、病院臨床の活動を通して学んだ経験を活かして、活動を行っています。どうしたら効果的で適切な相談活動ができるのかは、私が臨床活動を行っていく上で永遠のresearch questionでもあります。

私の大きなresearch questionは、すぐに解決できる問題ではないかもしれませんが、しかし、このresearch questionへの私の活動が、いつか児童生徒一人ひとりに微力ながら役に立つことを願いつつ、研究、相談活動を続けていきたいと思っています。



短距離走のような日々

附属久里浜特別支援学校 教諭 安宅由佳
（平成20年4月、千葉県立柏特別支援学校から）

4月、教員になってまだ数年の私には、筑波大学附属の学校と聞いただけで緊張を覚えていました。それと同時に、これから新しいことを学べるのだという期待に胸を膨らませていました。そうした中、実際には、新しい環境の中で、一つ一つのことを周囲の先生方に教えてもらわなければ何もできないことに、申し訳ない気持ちだけでいっぱいでした。しかしながら、周囲の先生方の温かい支えや向上心に触れていくうちに、「一つ一つが勉強。むしろ積極的に分からないことは教えてもらおう」「背伸びをしないで、自分にできることをがんばろう」と前向きな気持ちで日々を過ごすことができました。

現在は、この学校で教えて頂いたことの中で、特に、“子どもが分かって動くこと”ができるためのツールを使った支援方法や、子どもとの関わり方・距離のとり方・タイミングなどを大切にして、授業を積み重ねています。授業を改善していく中で、子どもたちが自



分で気づいて行動できた時、子どもたちが「できた」という表情を見せた時、私は心の中で「よしっ!」とガッツポーズをして喜んでいます。こうした子どもたちの姿が、私の一番の喜びです。

また、家庭との連携の中では、「お子さんが学校でこんなにがんばっていますよ」「このような支援をしたら、お子さんが自分で分かっているようになりましたよ」といったことなどの伝え方も大事なのだと分かりました。連絡帳だけではなく、「がんばり日記」といった子どもたちのがんばりの評価を積み重ねたツールの活用に取り組んだり、実際に家庭に出向いて指導したりしたことで、保護者の方々とより一層、子どもたちのがんばりや成長を喜び合い、同じ方向に向かえたように感じています。

あっという間に半年が過ぎ、まるで毎日「短距離走」をしているような日々を送っています。周りの方々に支えてもらいながらではありますが、これからも、子どもたちのいろいろな姿を引き出していけるように努力していきたいと思います。



受け継がれる高木博士の理想と理念

附属桐が丘特別支援学校 副校長 吉沢祥子

日本の肢体不自由教育の草創期に深く関与した人物の一人に、整形外科医であり東京大学名誉教授である高木憲次博士がいる。高木博士は、子ども達の障害の様子を表すのに「肢体不自由」という用語を提案し、「療育」という概念を提唱した。またドイツ留学で得た知見より、治療・教育・職能授与の機能を備えたドイツのクリュッペルハイムのような施設の必要性を唱え、昭和17年我が国初の肢体不自由児施設「整肢療護園」を作った。昭和22年、学校教育法が施行され養護学校も原則的には義務教育学校となったが、当時肢体不自由養護学校はまだ未整備であり、実際には肢体不自由児の義務教育は昭和54年の養護学校教育の義務制施行まで棚上げ状態であった。また、昭和22年当時の児童福祉法の肢体不自由児施設規定にも学校教育の機能は含まれていなかったため、昭和25年頃から各地の肢体不自由児施設の子どもの義務教育をどうするかという問題が顕在化して来る。このため当時の文部省は近隣の公立小・中学校の特殊学級を施設内に設置するという方策を示した。

昭和27年9月、高木博士は整肢療護園の園児の教育を東京教育大学に依頼し、既に園児の学習指導をしていた児童指導員が附属小学校講師として委嘱され、講師派遣という



形で同園児の学校教育が開始された。更に昭和29年4月、附属小学校に肢体不自由児特殊学級が新設され、整肢療護園内に小学部2学級が編制された。これらが今日の桐が丘特別支援学校の始まりである。

肢体不自由の子ども達の障害の多くは脳性まひであり、

当校の初期の研究
■ 紀要にも脳性まひ
■ 児の国語、読み方指導等の教科研究が
■ あり、脳性まひ児の教科指導に関心を
■ 向け啓発努力して
■ いた事がわかる。義務制施行後は、障害
■ の重度重複化が加速し、脳性まひ児の、
■ 殊に教科学習に関
■ わる研究はあまり関心が払われなくなった。しかし当校
■ では、今また新たに、脳性まひ児の認知特性に留意した
■ 教科指導について全校的研究として取り組んでいる。初期
■ の研究の記述にある“彼らの知覚異常にも留意しなければ
■ ならない”という点に更に踏み込んだものであり、「肢
■ 体不自由のある子どもの教科指導Q & A」として纏めた
■ ものも刊行した。

特別支援教育へ制度転換され、学ぶ場を問わず障害を持つ子どものニーズに沿った指導・支援の中味がより明確に問われる時、当校のこの“再度の”教科指導研究の取り組みは、通常学級に在籍する肢体不自由児のみならず、発達障害のある、学習に苦戦する子ども達への指導の一助とも成るだろう。多方面の関係諸機関と連携する個別の教育支援計画を策定する今、高木博士の「療育の碑」に刻まれている理想と理念は、今日の時代の要請と真底で結びつくものであり、桐が丘特別支援学校はその肢体不自由教育を負託される者として、腐心しているのである。



高木博士の「療育の碑」



以下、「交流会」引率者という立場から、ご報告いたします。

附属学校教育局が主催する、平成20年度（昨年より始められたので、今年度、第2回目を迎えることになります。）「新任教員交流会」が、6月18日（水）、23日（月）の両日実施されました。2日間の「交流会」には、延べ数で、54名（平成20年度に筑波大学附属学校の教員として採用されたのは、45名）の参加者がありました。

6月18日（水）は、午前中に、附属大塚特別支援学校を、そして、午後からは、附属駒場中・高等学校を訪れました。2日目に当たる6月23日（月）には、東京を離れて、校名にも使われる神奈川県横須賀市久里浜まで足を伸ばし、附属久里浜特別支援学校を訪問しました。

いずれの学校においても、校長先生や副校長先生が直々に、沿革を含めた学校概要の説明役を、また、学校見学（施設見学ばかりでなく、同時に授業参観もありました）の案内役を務めてくださいました。協議の時間もとられていましたが、各学校がご用意くださった当日のプログラムの内容が豊富で、参加者同士が互いに、情報や意見の交換を通して「交流」することは、必ずしも十二分にはできませんでした。

事後、参加者を対象にアンケートを実施しております。それによると、「交流会」は概ね好評でした。特に日程がハードであり（やむを得ない事情もありましたが）、本来の目的である「交流」が十分にできなかったことを、アンケート結果から、反省し、改善すべき点として挙げる事ができます。しかしながら、他の附属学校を訪ねる機会に恵まれない先生もいらっしゃると思いますが、これらの先生方には、今回のような学校訪問が、その学校の先生との出会いをもたらし、他校を知る貴重な機縁となった、とも考えられますので、「交流会」を教員相互の「交流」が始まる第一歩と捉えていただけたら、と思います。

末筆になりましたが、「新任教員交流会」のためにご準備、ご配慮くださり、篤い（そしてまた、熱い）歓迎を賜った、附属大塚特別支援学校をはじめ、駒場中・高等学校、久里浜特別支援学校の教職員の皆様、この場をお借りして、衷心より御礼申し上げます。



大塚特別支援学校



駒場中・高等学校



久里浜特別支援学校

《編集後記》

10月に入りますと、あの暑かった夏が嘘のように涼しくなりました。今年の夏といえば、みなさんには、暑い中に行われた免許更新制のための熱い講義が思い出されることでしょう。教育の西の雄たる広島大学、東の雄たる筑波大学、などと、どこかで言われておりましたが、教育の質が厳しく問われる昨今、教育において筑波大学に求められる役割の重さは日に日に増すようです。そんな中ですすめられた免許更新制にかかわる準備は、旧東京教育大学の威信をかけた大いなる意気込みが伝わってくるものでした。多くの附属校を有する強みを生かした附属校の授業を実際に参観できるタイプのものは、参加者の評判も非常に良いものだったと聴きます。もちろん試行段階ということで、いろいろと検討を要する事項は山積しているようです。免許更新制に関わることの是非も、未だ議論の余地があるようです。ですが、附属校のさらなる活躍が期待される事業であることは間違いなさそうです。来年もまた、暑い、熱い夏になりそうですね。

（田中輝美）

ポローニア
paulownia

vol. 13

発行日……平成20(2008)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……江口勇治

編集委員……西川公司・田中輝美・石川満佐育
五味貴久子・根本文雄・菊池信孝

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-irimax mm [日本製紙]